



体育・スポーツは からだに何を刻み込むのか

黒川哲也

阪神・淡路大震災から20年を迎えた。東日本大震災から4年を迎えようとしている。いずれの震災も、私たちに運動文化の意味を改めて考え直す課題を鋭く突き出した。震災後の体育・スポーツ実践の現実、被災した子ども・住民にとって体育・スポーツが癒やしやつかの間の喜びを与えたこと、スポーツの創りだしたつながりが、私たちの命や生活をつなぐ臍帯として機能したことを示した。一方、体育・スポーツが場所や道具といった基本的・物理的条件を欠いては決して享受し得ないこと、そして何よりも私たちのからだ・命や心の安寧という意味での平和がスポーツの土台であると同時に、体育・スポーツは平和を創り出す力をも持っていることも示された。ただ、体育・スポーツを行うこと、これを学ぶことが、被災した子ども・地域住民のこことからだの何を癒やし、育て、表現したのか、しているのかを明確につかむことは難しい。

本稿でも紹介されているカンボジアの子どもたちは、彼らが生まれる直前まで内戦の「置き土産」である地雷によって命の危険にさらされてきた。ポルポトによる弾圧は、地域から固有の踊りや祭りをも奪い去った。国を挙

げて体育・スポーツ振興の号令は掛けられているものの、体育授業も行われておらず、また満足な体育・スポーツ施設もない。それでも子どもたちは喜々として遊んでいる。決して良好とは言えない体位・体格面での成長の一方で、彼らの「身ごなし」は非常に優れているように見える。彼らの生活様式・遊び・仕事がかうしたからだを作り上げているのだが、気になるのは内戦という暴力が彼らのからだどころにどのような傷跡を刻み込んでいるのかということである。また、日本の「支援」の下で、まるで日本の学習指導要領のような体育カリキュラムが編成されているのだが、そのことはカンボジアの子どもたちのからだに何を刻み込むことになるのであろうか。

ひるがえって、私たちは体育・スポーツによってどんなからだを獲得しているのであろうか。それはどんな暮らし方、どんな社会を生み出す力につながるのであろうか。「うまくしてどうする」という問いは、私たちにとっていまでも答えきることのできない問いとして残されている。

(くろかわ てつや／編集部)